

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた
自己決定理論に基づく授業モデルの提案

長野 優・内田 昭利

Toward the Realization of “Proactive, Interactive, and
Deep Learning” Proposal of a Classroom Model Based on
Self-Determination Theory

NAGANO, Yu and UCHIDA, Akitoshi

大分大学教育学部研究紀要 第44巻第2号

2023年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 44, No. 2, March 2023

OITA, JAPAN

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた 自己決定理論に基づく授業モデルの提案

長 野 優*・内 田 昭 利**

【要 旨】 「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、学校教育において、学習の質を高めるための授業改善や生涯にわたって能動的に学び続けることのできる児童生徒の育成が求められている。そこで、本研究では動機づけの理論である自己決定理論 (Self-Determination Theory) に着目した。自己決定理論は、自律性の欲求・有能感の欲求・関係性の欲求が充足されることで内発的動機づけが高まるという理論であり、先行研究を概観すると、普通の授業で教師が行っている指導と関連が深いことがわかった。一方、実践が伴うことで自己決定理論は完成された理論へと近づくことができるにもかかわらず、日本における実践研究が少ないこともわかった。そこで本研究では、先行研究から得られた知見を基に学校での実践を想定して自己決定理論の授業モデルを提案する。

【キーワード】 自己決定理論 学習 授業 主体的・対話的で深い学び

I はじめに

文部科学省 (2017) は、平成 29 年に告示された学習指導要領の改訂のポイントとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現をあげており、そのために、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行い、現代において質の高い学びを実現し、資質・能力を身につけることで、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることを目標に掲げている。「主体的な学び」の例としては、学ぶことに興味や関心をもち、自らの学習をまとめ振り返るなどの活動がある。「対話的な学び」の例としては、個人で考えたことを、意見交換したり、議論をしたりするなど、協働的な活動がある。「深い学び」の例としては、情報を精査して考えを形成したり、考えを伝えあうことを通して集団としての考えを形成したりしていくなどの活動があるとされている (文部科学省, 2017)。また文部科学省 (2018a, 2018b, 2019) は、小学校・中学校・高等学校の学習指導要領解説総則編において、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かしつつ、学習の質を一層高める授業改善の

令和 4 年 10 月 31 日受理

* ながの・ゆう 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻

** うちだ・あきとし 大分大学大学院教育学研究科教職開発専攻

取り組みを活性化していくことが必要であることを述べている。これらのことから、現代の学校教育において、自らの力で学び続けることのできる児童生徒の育成が重要になってくるといえ、そのためには授業において「もっと学びたい」と思えるように学習意欲を引き出し、自律的に学ぼうとする児童生徒の育成を目指していかなければならない。

学習意欲に関連して、桜井・黒田(2004)は学校教育における心理学のテーマとなる学業の達成に関わる動機づけの問題に着目し、「自己効力感理論」、「内発的動機づけ理論」、「目標理論」の3つの理論を取りあげ、それらの理論が学校教育においてどのように活かされたのかについて、学校教育に応用した研究を整理し、分析している。その結果、3つの動機づけ理論の応用研究がかなり実施されており、授業実践に活かされるだけの知見が見出されていることを示している。その一方で、動機づけ理論に関する応用研究から得られた知見や授業・学習方法が、学校の教師に十分に利用されていないという課題も示している。その要因として、研究者側と学校関係者側、学校教育制度の3つの側面から問題を提起している。研究者側の問題としては、研究の成果を学校現場の現状を踏まえ、利用可能な形にして教師に伝えてこなかったことをあげている。つまり、研究者が研究のための研究を重視して、実践への貢献という視点を低く評価していること、学校現場の実情を考慮せず一方的に研究結果を伝えようとする態度に問題があるとの指摘である。一方、学校関係者側の問題としては、研究によって得られている知見について知らないということや、知っていても利用していないことを指摘している。これについては、子どもの動機づけを高めるための実践を理論と結びつけて考える意識が弱いこと、授業実践に有益な示唆をもつ研究知見を実践に活かそうとしてこなかった態度に問題があることを指摘している。そして学校教育制度の問題としては、限られた授業時間の中で決められた学習事項を教えなければならないという制約があるため、理論に基づく実践が困難であることをあげている。しかし、児童生徒の学習意欲を引き出そうと闇雲に授業実践を行っているだけでは、授業や学習方法の効果について根拠をもって説明することは難しく、授業改善をするにあっても、実施した授業の効果が理論に基づく客観的な検証がされないまま、教師の主観のみによって指導方法や学習内容が決められてしまう可能性が高い。したがって、研究から得られた知見を授業に応用し、理論に基づく授業実践や授業改善を行っていくことができれば、どのような教師の働きかけが児童生徒の学習意欲を引き出したのか、授業において設定した学習環境が、自律的に学ぼうとする児童生徒の育成にどのように寄与したのかを、動機づけの理論から客観的に検証することができると思う。そのためには、現状の課題を踏まえ、それらを克服できる理論を用いる必要がある。

様々な動機づけ理論がある中で、本研究では、学習動機づけと望ましい関係を示す自己決定性の強い外発的動機づけ(畑野, 2013; 吉崎・平岡, 2015)が、構成要素の1つとなっている「自己決定理論(Self-Determination Theory)」(Ryan&Deci, 2017)に着目したい。自己決定理論では、人間の基本的心理欲求である、自律性の欲求、有能感の欲求、関係性の欲求を充足させることで内発的動機づけが高まるとされている(Deci&Ryan, 2000; Ryan&Deci, 2000; Ryan&Deci, 2002)。自律性の欲求とは、自分の行動に関して意思を感じ責任をもちたいという欲求である。有能感の欲求とは、自分の能力や才能を発揮・表現するための機会や支援を欲することであり、関係性の欲求とは、他者とのつながりや関わりをもちたいと感ずることである(Ryan&Deci, 2017)。(詳細は、次章で述べる。)

理論として完成しているように見える自己決定理論であるが、西村(2019)は、動機づけ研

究の最前線の理論として、自己決定理論を紹介しつつも、発展途上の理論であると指摘している。その理由として、自己決定理論に関する研究は理論ベースであることをあげている。つまり、実践が伴うことで、自己決定理論は完成された理論に近づくのである。

そこで、本研究では①自己決定理論とはどのような動機づけの理論であるかについて概要を述べ、②日本における「学習・授業」を対象とした自己決定理論に基づく先行研究を概観し、自己決定理論に基づいた教師の働きかけによる成果と課題を明らかにしたうえで、③学校教育に自己決定理論を応用するための枠組みを提案することを目的とする。

Ⅱ 自己決定理論

1 自己決定理論の概要

自己決定理論とは、人間の行動と人格の発達に関する、経験的な根拠に基づく有機的な動機づけの理論であり、精神的な発達、意欲、幸福を促進する要因、あるいはそれらを枯渇させ、阻害するような要因を批判的に探究しているものでもある (Ryan&Deci, 2017)。また、自己決定理論は動機づけのタイプを自律性の程度に応じて、動機づけられていない「無調整」から、外発的動機づけとして「外的調整」、「取り入的調整」、「同一化的調整」、「統合的調整」、内発的動機づけとして「内的調整」に分類し、連続体で捉えている。また、外発的に動機づけられた行動は、その価値を内在化・内面化 (internalization) することで内発的動機づけへと近づけていくことができ、他者とのつながりや3つの基本的心理欲求に対する周囲の支援があれば内在化・内面化 (internalization) は起こりやすいと提唱している (Ryan&Deci, 2000)。周囲の支援には、自律性の欲求を対象とした自律的支援 (autonomy support)、有能感の欲求を対象とした構造 (structure)、関係性の欲求を対象とした関与 (involvement) がある。自律的支援 (autonomy support) では、有意義な選択肢を提供することや、主体性や発言を促進させる。構造 (structure) では、評価や制御を行うのではなく、情報としての豊富なフィードバックや目標、環境との関わりによって生じる効果に関する情報を提供し、関与 (involvement) では、相手を思いやり、支援を行ったり気遣ったりする (Ryan&Deci, 2017)。

また、自己決定理論は、6つのミニ理論によって構成されている (Ryan&Deci, 2017)。西村 (2019) が、「初めて自己決定理論の理論体系が現在に近い形で紹介された」と取り上げた Ryan and Deci が 2002 年に出版した『Handbook of Self-Determination Theory』では、自己決定理論を構成するミニ理論として、「認知的評価理論 (Cognitive Evaluation Theory)」、「有機的統合理論 (Organismic Integration Theory)」、「因果志向性理論 (Causality Orientations Theory)」、「基本的心理欲求理論 (Basic Psychological Needs Theory)」があげられていた。その後、Ryan and Deci によって 2017 年に出版された『Self-Determination Theory: Basic Psychological Needs in Motivation, Development, and Wellness』では、先に示した4つのミニ理論に加え、「目標内容理論 (Goal Contents Theory)」、「関係性動機づけ理論 (Relationships Motivation Theory)」があげられている。以下に、Ryan and Deci (2017) に基づき6つのミニ理論の概要を述べる。

2 自己決定理論を構成する6つのミニ理論

自己決定理論を構成している6つのミニ理論は、動機づけと心理学的な統合の様々な側面に

対応している。したがって、それぞれのミニ理論により、機械論的なものから社会的なものまで、あらゆるレベルの分析から情報を得ることができる (Ryan&Deci, 2017)。

1) 認知的評価理論 (Cognitive Evaluation Theory)

認知的評価理論は、自身の周りの社会環境における出来事が内発的動機づけにどのような影響を与えているかに主軸を置いている。また、自律性や有能感を自身の行動の中で認識できるよう支援を行うことで、内発的動機づけを高める。

2) 有機的統合理論 (Organismic Integration Theory)

動機づけのタイプを、自律性の程度によって分類し動機づけられていない状態を「無調整」、外発的動機づけを「外的調整」、「取り入れの調整」、「同一化の調整」、「統合的調整」、の4つ、内発的動機づけを「内的調整」に分類し、連続体として捉えている理論である。

3) 因果志向性理論 (Causality Orientations Theory)

動機づけのスタイルにおける個人差に焦点を当てており、自律的な志向性、非人格的な志向性、統制的な志向性の、3種類の志向性を想定している理論である。

4) 基本的心理欲求理論 (Basic Psychological Needs Theory)

自己決定理論の核となっている、自律性の欲求、有能感の欲求、関係性の欲求の3つの心理的欲求の概念と、精神的健康や幸福との関係を精密に説明した理論である。基本的心理欲求理論は、自律性の欲求や有能感の欲求に加え、関係性の欲求を想定し、それぞれの欲求が充足されることで、精神的な健康につながると主張している。

5) 目標内容理論 (Goal Contents Theory)

人々が追い求めている人生目標の内容を取りあげている。また、内発的な目標と外発的な目標を区別し、それらが動機づけや精神的健康に及ぼす影響から発展した理論である。

6) 関係性動機づけ理論 (Relationships Motivation Theory)

3つの基本的心理欲求の1つである「関係性」に着目した理論である。質の高い人間関係が構築され、親密な相手から自律性の欲求に対する支援を受けたり、または自分が相手に自律性の欲求を満たすような支援を行ったりすることで、相互作用的に基本的心理欲求が満たされ、精神的な健康を高めるとしている。

3 授業への応用に適した基本的心理欲求理論

ここで、学習意欲を引き出すとともに自律的に学ぼうとする児童生徒の育成を目指すという視点で、自己決定理論を学校教育に応用することを考えた。Deci and Ryan (2000) や Ryan and Deci (2000, 2002) は、3つの基本的心理欲求が充足されることで内発的動機づけが高まるとしている。そして、6つのミニ理論の概観を通して、自己決定理論の核となる3つの基本的心理欲求の概念を説明した理論が、基本的心理欲求理論であることがわかった。また、基本的心理欲求理論は各心理欲求の充足に向けて何をすべきか、という手だてについても提示しており、重要な活動を上手く行うことができたり、自分の行動を他者から承認されたり、他者とつながることのできる環境が必要であるとしている。そのために、先に示した自律的支援 (autonomy support) や構造 (structure)、関与 (involvement) が重要であり、教師が各心理欲求の充足を適切に支援した場合、児童生徒は自律的な動機を示し、学業を行うための能力をより強く認識できるようになることが示されている (Ryan&Deci, 2017)。

以上を踏まえ、教師が授業の中に、児童生徒が発表や学習活動を上手く行うことができるよ

うに課題や学習活動を設定し、他者との関わりをもたせる中で、自身の取り組みが他者に承認されていると感じられるような指導を取り入れることができれば、児童生徒の内発的動機づけが高まると予想できる。そこで、3つの基本的心理欲求と、その充足に向けた具体的な手だてが説明されている基本的心理欲求理論に着目することで、学習や授業において各心理欲求を充足する教師の指導の工夫について考察することができると考えた。

Ⅲ 学習・授業を対象とした自己決定理論の研究概要

自己決定理論を学校教育に応用するにあたって、どのような研究が行われてきたのか確認するために、論文検索サイト CiNii を用いて論文検索を行った（検索日：2022/10/23）。まず、「自己決定理論」をタイトルに検索を行ったところ、190件のヒットがあった。本研究では、自己決定理論を学校教育に応用し、授業モデルを提案することを目的としているため、先行研究から各心理欲求を充足させる学習方法や教師の手だてを検討したい。そこで次に、フリーワードに「学習」または「授業」を追加し、検索すると80件がヒットした。これらの論文のうち、論文となっていない学会発表要旨や重複しているものを省いたことで、最終的に36件を本論文でのレビュー対象とした。

表1 「学習・授業」における
自己決定理論研究の
対象者による分類

対象者	論文数
小学生	6
中学生	4
高校生	0
大学生	18
専門学生	1
看護学生	2
留学生	1
教師	1
なし	3

1 研究の対象者に基づく分類

授業・学習に関する自己決定理論研究36件の対象者について表1に示す。授業・学習に関する自己決定理論研究では、大学生を対象者とした論文が18件であり（Ebara, 2014; 藤原, 2007; 林, 2006; 廣森・田中, 2006; Honda & Sakyu, 2005; 飯村・野村, 2014; 小池, 2012; 黒田, 2021; 岡田・中谷, 2006; 佐山, 2015; 島・馬・稲垣, 2020; 城野, 2017; 鷺見, 2013; 鷺見, 2014; 鷺見, 2015; 鷺見, 2017; 山本・大場, 2018; 吉野, 2008）、半数を占めている。また、小学生を対象とした論文は6件（安藤・布施・小平, 2008; 有馬, 2018; カレイラ松崎, 2017; 伊藤, 2017; 染谷, 2019; 玉木, 2013）、中学生を対象とした論文は4件（名越・久保・伊藤, 2018; 西内・川崎, 2017; 杉山, 2021; 築瀬・加藤・角田・市野, 2010）あったが、高校生を対象とした論文は見受けられなかった。対象者を設定していない3件の論文のうち、Conrad (2022) は教育実践者によっ

て使用されている様々なアクティブラーニングタスクに学習効果があるかについて、Honda and Sakyu (2006) は言語学習に影響を与える動機づけについて、田中 (2019) は小学校英語において、自己決定理論を用いて学習指導要領を具体化する試みについて述べている。

2 実践研究における研究領域に基づく分類

これまでに自己決定理論に基づいた実践研究が、どのような研究領域で実施されてきたか探るために、研究領域ごとに分類を行った。以下にそれぞれの領域における先行研究の概要を述

べていく。

動機づけと様々な要素との関連を調べた研究が7件あった。安藤ら(2008)は積極性, 佐藤(2012)は自律性の欲求と自尊心, 佐藤(2013)は友人関係への動機づけや自律性欲求・有能さの欲求との関連, 染谷(2019)は聴解力, 築瀬ら(2010)は体育学習における教師の指導行動との関連について研究を行っている。加えて, 原田(2008)と藤原(2007)は留学経験と学習動機づけの関連を調べている。

調査対象者の動機づけの様子や構造に関する研究が4件あった。森山・間宮・山下・小倉・中尾(2021)は中学校教員のICTの授業活用に対する動機づけ, カレイラ松崎(2017)は日本の小学生の英語学習に対する動機づけのプロセス, 佐山(2015)はロシア語学習者の動機づけの構造, 玉木(2013)は自閉症スペクトラム児の学習に対する動機づけについて調査を行っている。

ある要素が動機づけに与える影響, または動機づけやそのスタイルが, ある要素に与える影響を検討した研究が5件あった。岡田ら(2006)の動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響を検討した研究や, 島ら(2020)の大学生の授業に対する動機づけに関して, 講義の選択可能性による差異を検討した研究がある。さらに, 伊藤(2017)は体育の授業における教師行動が, 児童の動機づけに及ぼす効果について, 城野(2017)は動機づけがペア学習の楽しみに与える影響を, 西内ら(2017)は理科学習の意義の認識を科学的な能力と捉えることが動機づけに与える影響を検討している。

学習動機づけと適応について, 自己決定理論の観点から検討している研究が4件あった。鷺見は学習動機づけと学習関連の適応との関係(鷺見, 2013), 学習動機づけが心理的適応状態に及ぼす効果(鷺見, 2014)や, 後の学習関連適応感に及ぼす効果(鷺見, 2017)について検討しており, 黒田(2021)は自律的・統制的な大学進学動機と入学後の適応との関係について検討している。

自己決定理論に基づいた尺度の作成や検討を行った研究が3件あった。Honda and Sakyu(2005)は日本人英語学習者を対象とした, 内発的・外発的動機づけ尺度の並存的および構成概念の妥当性について検証した。さらに, 林(2006)は大学生用の英語学習動機づけ尺度, 鷺見(2013)は学習全般に対する動機づけ尺度の作成を行っている。

その他に, 小池(2012)は自己決定理論の動機づけ理論を学生指導へ応用するために, 実際の学生指導の問題と自己決定理論との対応の概要について検討している。また, 前述したように対象者を決めずに自己決定理論を用いて, 教育実践者によって使用されている様々なアクティブラーニングタスクに学習効果があるかについて検討したConrad(2022)の研究や, 言語学習に影響を与える動機づけや学習指導要領を具体化する試みについて述べたHondaら(2006)や田中(2019)の研究がある。

最も多かったのは自己決定理論に基づいた授業を行い, その学習効果について検討した研究で9件であった。それらの実践研究について, どのような教科領域を対象としているのか分類を行ったところ, 7件は英語を対象としていた(Ebara, 2014; 廣森ら, 2006; 飯村ら, 2014; 白土, 2019; 杉山, 2021; 山本ら, 2018; 吉野, 2008)。残りの2件は社会(有馬, 2018)と体育(名越ら, 2018)を対象としていた。

3 自己決定理論に基づく学習・授業の概要

本節では、自己決定理論に基づいた9件の実践研究について概観し、自己決定理論における手立てを抽出する。

廣森ら(2006)は英語の授業において、大学2年生113名(男子81名、女子32名)を対象に、自己決定理論における3つの基本的心理欲求を満たした授業実践が、英語学習者の内発的動機づけを高めることができるのかについて検証を行っている。授業の効果の分析では、英語学習における心理欲求尺度、英語学習における内発的動機づけ尺度を作成し、信頼性・妥当性を検証したうえで調査を実施し、質問紙尺度と自由記述調査の結果を用いてt検定、およびKJ法で分析している。その結果として、3つの心理的欲求を満たした授業実践の中で、学習者の内発的動機づけが高まったと結論付けている。

飯村ら(2014)は英語の授業において、大学1年生112名を対象に、自己決定理論に基づいた動機づけに着目し、半期に渡ってスピーチ指導を行うことで自己評価が向上するか調査を行っている。実践の分析では、各心理欲求と学習者の間や動機づけに関連があるか調査するために、田中・廣森(2007)の質問紙調査において「この英語の授業では」となっている部分を、「このスピーチコンテスト企画では」に変更し使用している。また、自己評価の向上について分析するために、「CAN DO リスト」を用いている。実践前後の自己評価の比較をしたところ、スピーチコンテスト直前では学習者の自信が向上していることがわかったとしている。

白土(2019)は英語の授業において、専門学校2年生45名(男子28名、女子17名)を対象に、自己決定理論とプロジェクト重視の授業の関係性に焦点を当て、プロジェクト重視の授業実践が、英語に苦手意識をもつ学生たちの3つの心理的欲求と内発的動機づけにどのような影響を与えるのかを調査した。実践結果については、質問紙調査と、自由記述による授業感想についてKJ法を用いた分析を行っている。なお、質問紙調査に関しては、廣森・田中(2006)、田中ら(2007)の2種類の質問紙を目的と参加者に合わせて修正したものを用いている。質問紙調査の分析の結果、プロジェクト重視の授業実践が、参加学生の自律性・有能感・関係性の欲求を満たし、内発的動機づけを高めたことが示されている。

杉山(2021)は英語の授業において、中学3年生115名(男子53名、女子62名)を対象とし、自己決定理論に基づいて生徒の動機づけを明らかにするために、OPPシートを活用したライティング指導を行っている。加えて、実践の前後に質問紙調査、事後に自由記述調査を実施した。生徒の英語を学ぶ意欲の向上の変容を検証する方法としては、廣森(2006)を参考に、田中(2014)の課題準拠と過去準拠の有能感という視点を加えた質問紙調査を事前と事後に行っている。平均値の差を両側のt検定により検討した結果、英語のライティングの授業における意図的な働きかけは、生徒の心理的欲求を満たし、動機づけを高めたことが示された。

山本ら(2018)は英語の授業において、大学1年生39名を対象とし、2クラスにランダムに分けた。そして、オンライン学習システムのアプリケーションソフトであるGoogle Classroomを利用して、オンライン学習と対面授業を組み合わせたブレンド型授業(反転授業)を展開し、この授業を受けたグループを介入群、通常の授業を受けたグループを統制群として、動機づけ質問紙調査の前後差を比較している。ここでは主に、介入群が行ったeラーニングが3つの基本的心理欲求にどのように影響するのか、廣森(2003)、Nishida(2013)、Noels, Pelletier, Clement, and Vallerand(2000)を参考に検討した尺度を作成し、実施することで分析を行っている。加えてLMS(ラーニング・マネジメント・システム)の使い勝手について自由記述を

分析し、介入群に負の効果が現れているとしたうえで、その背景には、習熟度や学習における負荷、交流不足やPCの操作性に問題があったと推察している。

吉野(2008)は英語の授業において、大学生80名を対象とし、英語学習の動機づけについて自己決定理論の視点から分析している。授業実践前に、廣森(2006)が作成した心理欲求尺度や英語学習における動機づけ尺度から質問項目を抽出し、学生の心理欲求や英語に対する意識について調査を実施している。授業実践後にも英語に対する意識調査を行い、実践前と比較し内発的動機づけの平均点が向上していることをあげている。しかし、調査の結果は授業実施前後の平均値の比較にとどまっており、統計的な検討は実施されていないため、有意差の有無については言及されていない。また、心理欲求については授業実践後の調査は実施されなかった。

以上の6件の実践研究は、廣森が携わっている研究(廣森, 2003; 廣森, 2006; 廣森ら, 2006; 田中ら, 2007)で用いられた尺度を参考に、質問紙の作成や分析が行われている。

Ebara(2014)は英語の授業において、大学1年生37名を対象とし、自己決定理論(Deci & Ryan, 2002)の「3つの基本的な心理的ニーズ」を学習環境に提供する事を踏まえ、3つの英作文プロジェクトを導入し、これらの学習効果について、学生の作品や学内テストの結果、学期末アンケートの記述などを通して分析した。研究の結果、多様な習熟度の言語学習者が自己決定理論に基づく環境下で英語力を伸ばすことができるかについては、3つの心理的欲求の充足が、ある程度肯定的に働くことが示唆された。一方で、約1年前に実施した英語のテストと同様のものを実践後に行ったところ、平均点が5点向上したことをあげていた。しかし、通常の授業を続けていても英語力の向上に伴って得点も上がることが考えられ、自己決定理論に基づいた授業の効果によるものであると断言はできないことから、客観的な検証を行うために尺度を用いた分析等が必要だと考える。

有馬(2018)は社会の授業において、小学4年生71名を対象に、日々の生活の中で出されているごみの処理や再利用の方法について学習するにあたり、自己決定理論に基づいた授業の実施を試みている。自己決定理論に基づく授業の学習効果については、学習への意欲について特に課題が見られた2名の児童を抽出し、授業者の実践レポートや活動の様子から検討している。その結果、自律性の欲求を満たすことが学習に対する意欲を喚起することや、有能感の欲求の低下を防ぐために児童が取り組みやすいテーマを提示したことが、自律性や有能感の欲求の充足に繋がり学習への意欲を生んだことが示唆された。しかし、授業者の実践レポートから分析を行っていることから、有馬(2018)は自身の研究の妥当性を担保するためには、客観的な検証が必要になることを指摘している。

名越ら(2018)は体育の授業において、中学2年生女子30名を対象とし、器械運動の授業において3つの基本的心理欲求の充足に向けた教師の働きかけが、動機づけにどのような影響を及ぼすかについて検討している。実践については、藤田(2010)が作成した体育授業用心理的欲求尺度、体育授業用動機づけ尺度を用いて、授業前後の結果をt検定によって分析している。調査の結果、自律性の欲求、有能感の欲求、教師との関係性の欲求が充足された生徒ほど内発的動機づけが高まる傾向にあることが示された。

以上の実践研究の概要を通して、3つの基本的心理欲求を充足させようとする手だてが、授業内で様々に講じられていることが分かった。各心理欲求の充足に向けた指導について、先行研究から抽出し、表2にその概要をまとめる。

表 2 実践研究における 3 つの基本的心理欲求の充足に向けた指導の概要

論文	自律性の欲求	有能感の欲求	関係性の欲求
有馬 (2018)	<ul style="list-style-type: none"> 「ごみの処理と再利用」という質問のテーマを与え、質問をつくっていく。 教科書や資料から、自分が選択した問いの答えについて探す。 学習の表現方法と活動場所は児童が選択できるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> 探究活動が促進されるような資料の配布に加え、活動が進んでいる児童は見守り、停帯している児童とは対話をするなど支援を行う 肯定的なコメントをクラスメートからもらったり、自分の努力の成果について自分自身の言葉で称賛したりする 	<ul style="list-style-type: none"> 4人組でホワイトボードに質問を書き添えていく際に、マーカーの本数を2本にすることで児童同士の関わりが生まれるようにする 児童同士でお互いのレポートを見合う時間を設定したり新聞の読み合いにおいて、クラスメートから肯定的なコメントをもらったりする
Ebara (2014)	<ul style="list-style-type: none"> 学期末のジョーテライティングにおいて、自分の考えを自由に表現する活動 	<ul style="list-style-type: none"> 毎週英語の歌や詩を授業で紹介し、作品中の表現を活用し、使える文や文法事項を借りて自分の考えを表現する 授業内で紹介された英語の歌や詩を参考に、学期末のジョーテライティングで自分の考えを表現する 	<ul style="list-style-type: none"> 各自が密かにクラスメート1人を担当し、クリスマスメッセージやプレゼンを各自用いたり、1カ月間を通してメッセージの修正を繰り返したりする
廣森 (2006)	<ul style="list-style-type: none"> 学習活動において学習者が内容を選択でき、責任を感じられる手だてを講じる 	<ul style="list-style-type: none"> 英語の発表原稿に対して、文法・語法的なことに限らず内容自体にもコメントするなど、建設的かつ情報的なフィードバックを与える 	<ul style="list-style-type: none"> 共同作業によって学習を進めることができる環境を設定する
飯村ら (2014)	<ul style="list-style-type: none"> 自ら考え行動することを促し、発表内容を各々で決めさせたり、目的地的情報収集を行う中で英単語を学ばせたりするなど選択や責任を与え、学習者の決定を尊重する 	<ul style="list-style-type: none"> グループ内でのパラグラフのピアチェックや発表練習の評価において、肯定的な内容を求める 	<ul style="list-style-type: none"> グループによる学習形態を取り入れる グループによる発表練習やパラグラフのピアチェックを行い、コンテスタ出場という共通の目標に対して協力して取り組める環境を設定
名越ら (2018)	<ul style="list-style-type: none"> 個人の課題に応じた授業環境を設定し、生徒に選択の機会を与える 	<ul style="list-style-type: none"> 課題のレベルを適切に設定し、スモールステップを踏ませる 	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動を通して、教え合いを行ったり教師の働きかけとして、肯定的・確正のフィードバックを行ったりする
白土 (2019)	<ul style="list-style-type: none"> 教師はファシリテーターに徹し、授業におけるトピックの決定や、教科・Unitの選択、希望した班の計画や実践を行う 	<ul style="list-style-type: none"> 教師やクラスメートからの建設的なフィードバックに基づいて、肯定的な自己評価を行う 	<ul style="list-style-type: none"> 班で計画や実践を行っていく
杉山 (2021)	<ul style="list-style-type: none"> 英作文の内容を自由に選択できるようにし、英作文の見直しや書いている間に感じた疑問等を書きだす時間を設定する 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の楽しみ方を英語で外国の人に伝え、フィードバックをもらったり、ルーブリックやポートフォリオを活用したりする 毎時間の振り返りにおいて、文法・語法的なことに限らず、内容自体にもコメントするなど教師による肯定的なフィードバックを行う 	<ul style="list-style-type: none"> グループ内で、他の生徒の英文に対して感想やアドバイスを付箋に書いたり、それをポートフォリオに貼ることで、関わり合いの中で学習したことを振り返ることができるようにする
山本ら (2018)	<ul style="list-style-type: none"> オンラインによる自主的な学習や、興味のあるオンライン教材を自分で選択できるようにする 	<ul style="list-style-type: none"> オンラインディスカッションでスピーキングの疑似体験をさせ、話すことに自信をつけさせたり、書いた英文についてクラスメートからもフィードバックを受けさせたりする 	<ul style="list-style-type: none"> オンライン学習において、学生同士や教員との交流を活性化させ、意見や要求等をいつでも教員に伝えるよう促す
吉野 (2008)	<ul style="list-style-type: none"> 発表内容や、発表人数は自由に選択できるようにし、Graded Readersを取り入れ、各自授業時間外に読み進めていく 	<ul style="list-style-type: none"> 学生に自信をもたせるために、必ず肯定的なコメントを行い、その後に改善点を加える 	<ul style="list-style-type: none"> プレゼンテーションを取り入れることで、友人と協力したり、発表者に耳を傾けたりすることで、支持的な教室環境を作る

表2の概要から、研究者によってそれぞれの欲求を充足させるための手だてが共通している部分があれば、異なっている部分もあり、確立された手法はないのではないかと考える。しかし、大枠としては、①学習活動や内容にある程度の自由度をもたせ、学習者に選択・決定させるとともに責任を提供し、②ペアやグループによって協力しながら学習を進め、③学習者同士や教師から建設的で、様々な事柄に対するコメントなどの情動的なフィードバックを受けるという3つの指導が軸となっていることがあげられよう。

次章では、学習・授業全般で活用できる授業モデルの提案を行う。

IV 自己決定理論に基づく授業モデル

先行研究から得られた3つの基本的心理欲求の充足に必要な活動を基に、学習内容等の選択・決定や、教師や他者との関わり合いを授業の中でどのように位置づけ、実践を行っていくか具体化し、図1に示した。既に学習事項が決められている学校教育において、学習内容等を自由に選択・決定させることは容易ではない。しかし、調べ学習を授業に取り入れることでその課題は克服できるかもしれない。調べる内容については、学習事項に基づいてある程度の範囲を設定し、その中から自由に選択・決定させることができる。一方、ここで教師が介入せず調べる内容を完全に自由としてしまっただけでは、「何をしたらよいかわからない」という児童生徒が出てくることも想定され、自律的な活動が行われなくなる可能性が高くなる。よって、ある程度の範囲を指定し、その中から自由に選択・決定し調べ学習を行うことは自律性の欲求に対して有効に働くと考えられる。また、調べ学習を通して考えたことや分かったことをペアやグループ内で共有することで、他者との関わり合いが生まれ、そこで建設的かつ情動的なフィードバックを相互に行うことにより、有能感の欲求と関係性の欲求が充足されると考える。

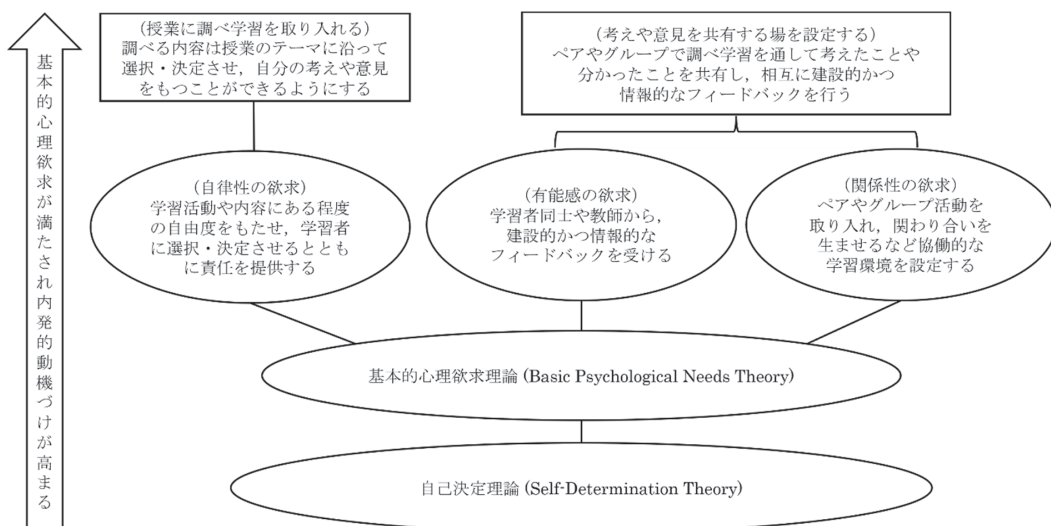


図1 自己決定理論に基づいた授業モデルの提案

また、この授業モデルにおけるプロセスは、1時間の授業内で必ずしも完結させるものではない。理由として、先行研究においても断続的な実践の中で各心理欲求の充足が図られている

ことや、学校現場では決められた時間内に決められた学習事項を学ぶ必要があり、時間に制約があることがあげられよう。したがって単元を通した指導において、各授業内で充足させる心理欲求を焦点化し、実施することが重要になってくる。

9件の実践研究の概観を通して得られた、自己決定理論における3つの基本的心理欲求を充足させる指導と、学校現場における教師の働きかけを関連させて考えてみると、これらの心理的欲求の充足につながる授業を教師は普段から行っているのではないだろうか。例えば、児童生徒の興味・関心を引き出す学習課題を設定し、主体的に学ぶことのできる環境を整えたり、発表活動やグループ学習などを取り入れることで、自己の能力を示す機会や他者と関わり協働的に学習に取り組めるようにしたりしていると考えられる。そして、このような児童生徒が自律的に学習に取り組めるような環境の設定や授業中の指導は、自己決定理論における基本的心理欲求を充足させる働きかけと関連しているといえる。したがって、自己決定理論で得られた知見や授業・学習方法を教師が意識的に取り入れることができれば、限られた授業時間であっても普段の授業から理論に基づく実践が可能となり、教師のどのような働きかけが児童生徒の動機づけを高める要因となったのかについても、質問紙などの尺度を用いた調査や分析をすることで、学習効果を理論に基づいて客観的に検証することができる。

V まとめ

本研究では、学校教育で育成を目指す児童生徒の姿から現在求められている授業改善について述べ、動機づけの理論である自己決定理論に着目した。そして、自己決定理論を学校教育に応用するにあたって、現在までにどのような研究がなされてきたのか知るために先行研究を概観した。その結果、実践を伴っている研究はわずか9件にとどまっており、教育現場において理論に基づく実践がほとんど行われていないことがわかった。これは、桜井ら(2004)が、学校教師の実践と理論を結びつける意識の弱さを指摘しているように、現場では新たな授業・学習方法には目が向いていないことを要因に、自己決定理論研究においても実践を伴う研究が少なかったのではないかと推察する。しかし、自己決定理論は実践が伴うことで完成された理論に近づくことができるため、今後さらに実践を伴った研究を進めていく必要があるといえる。

また、学校には様々な児童生徒が在籍しており、それぞれの動機づけの程度は一様ではない。そのような中でも、教師は集団に対する指導や個々の児童生徒に対する指導を工夫し、充足させる努力をしている。その際、自己決定理論に基づいて作成された既存の尺度を利用し、それぞれの児童生徒がどの程度動機づけられているか把握することができれば、集団や個々に応じてその後の適切な指導方法を検討していくことができるのではないだろうか。

以上を踏まえ、自己決定理論が学校教育に応用しやすい動機づけ理論であると考えとともに、3つの基本的心理欲求の充足に向けた指導は、冒頭で示した「主体的・対話的で深い学び」を促すための学習過程にも関連しており、自己決定理論を学習や授業に応用することで、学びの質をより一層高める授業改善の推進に寄与することができる。本研究が、学校教育における自己決定理論に関する実証研究の促進につながり、理論の完成に寄与するとともに、内発的動機づけが促され、生涯にわたって能動的に学び続けることのできる児童生徒の育成に貢献できることを願う。

参考文献

- 安藤 史高・布施 光代・小平 英志 (2008). 授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響 教育心理学研究, 56 (2), 160-170.
- 有馬 佑介 (2018). 自己決定理論に基づいた児童の意欲を高める授業の開発 東京学芸大学教職大学院年報, 6, 61-72.
- カレイラ松崎 順子 (2017). 日本と韓国の小学生の英語学習に対する心理的三欲求と動機づけ: 自己決定理論の観点から 東アジア研究, 66, 45-58.
- Conrad, M. (2022). Selected active learning strategies as viewed through the lens of self-determination theory. 多摩大学紀要, 14, 73-87.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11 (4), 227-268.
- Ebara, S. (2014). Cultivating learner autonomy toward English writing: A program based on Self-Determination Theory. 環太平洋大学研究紀要, 8, 79-86.
- 藤田 勉 (2010). 体育授業における動機づけ因果連鎖の検討 鹿児島大学教育学部研究紀要 (教育科学編), 19, 41-50.
- 藤原 三枝子 (2007). ドイツ語専修学生のドイツ語学習の動機づけ: ドイツ滞在経験が学習意欲の変化について物語るもの: 自己決定理論に基づいたアプローチ 言語と文化, 11, 57-79.
- 原田 登美 (2008). 留学経験は学習動機にいかに関わっているか: 「自己決定理論」に拠る「甲南大学 Year in Japan プログラム留学生」の留学と日本語学習の動機の変化 言語と文化, 12, 151-171.
- 畑野 快 (2013). 大学生の自律的な学習動機づけの検討: 学習・キャリアの変数との関わりから 青年心理学研究, 24 (2), 137-148.
- 林 日出男 (2006). 自己決定理論に基づく大学生用英語学習動機づけ尺度の作成: 既存尺度との比較考察 日本言語テスト学会研究紀要, 9, 117-128.
- 廣森 友人 (2003). 学習者の動機づけは何によって高まるか: 自己決定理論による高校生英語学習者の動機づけの検討 *JALT Journal*, 25 (2), 173-186.
- 廣森 友人 (2006). 外国語学習者の動機づけを高める理論と実践 多賀出版
- 廣森 友人・田中 博晃 (2006). 英語学習における動機づけを高める授業実践: 自己決定理論の視点から 外国語教育メディア学会機関誌, 43, 111-126.
- Honda, K., & Sakyu, M. (2005). The concurrent and construct validity of intrinsic/extrinsic motivation in Japanese EFL learners: A self-determination theory perspective. 教科教育学論集, 4, 41-54.
- Honda, K., & Sakyu, M. (2006). New orientations in language learning motivation: Intrinsic/extrinsic motivation and self-determination theory. 教科教育学論集, 5, 35-47.
- 飯村 文香・野村 幸代 (2014). スピーチ指導による学習者の心理的変化: 自己評価と自己決定理論に基づいた動機づけに着目して 関東甲信越英語教育学会誌, 28, 135-147.
- 伊藤 豊彦 (2017). 体育学習における教師行動が児童の動機づけに及ぼす効果に関する研究: 自己決定理論からの分析 体育科教育学研究, 33 (2), 35-47.
- 小池 伸一 (2012). 動機づけ理論と学生指導への応用: 自己決定理論の援用 保健医療技術学部論集, 6, 65-78.
- 黒田 祐二 (2021). 自律的・統制的大学進学動機と入学後の適応: 高等学校における進路指導・生徒指導・学習指導に対する自己決定理論からの示唆 福井県立大学論集, 55, 81-97.
- 文部科学省 (2017). 新しい学習指導要領の考え方: 中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/_icsFiles/fieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 文部科学省 (2018a). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説総則編 東洋館

- 文部科学省 (2018b). 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説総則編 東山書房
- 文部科学省 (2019). 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説総則編 東洋館
- 森山 潤・間宮 和寿・山下 義史・小倉 光明・中尾 尊洋 (2021). 自己決定理論に基づく中学校教員の ICT 授業活用に対する動機づけ状況の把握: 研修モデルのデザインに向けて 兵庫教育大学研究紀要, *59*, 47-55.
- 名越 由佳・久保 研二・伊藤 豊彦 (2018). 体育授業における生徒の動機づけに及ぼす教師の働きかけの影響に関する実践的研究: 自己決定理論からの分析 スポーツ教育学研究, *37*(2), 61-74.
- Nishida, R. (2013). The L2 self, motivation, international posture, willingness to communicate and can-do among Japanese university learners of English. *Language Education & Technology*, *50*, 43-67.
- 西村 多久磨 (2019). 自己決定理論 上淵 寿・大芦 治 (編) 新・動機づけ研究の最前線 (45-73) 北大路書房
- 西内 舞・川崎 弘作 (2017). 理科学習の意義の認識が動機づけに及ぼす影響に関する研究: 自己決定理論における動機づけに着目して 日本教科教育学会誌, *40*(1), 59-68.
- Noels, K. A., Pelletier, L. G., Clement, R., & Vallerand, R. J. (2000). Why are you learning a second language ? Motivational orientations and self-determination theory. *Language Learning*, *50*(1), 57-85.
- 岡田 涼・中谷 素之 (2006). 動機づけスタイルが課題への興味に及ぼす影響: 自己決定理論の枠組みから 教育心理学研究, *54*(1), 1-11.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being. *American Psychologist*, *55*(1), 68-78.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). An overview of self-determination theory: An organismic-dialectical perspective, [in:] *Handbook of Self-Determination Theory*. Rochester, NY: The University of Rochester Press.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-Determination Theory: Basic Psychological Needs in Motivation, Development, and Wellness*. New York: The Guilford Press.
- 桜井 茂男・黒田 祐二 (2004). 動機づけ理論は学校教育にどのように活かされたか: 応用研究の体系化と授業実践への貢献の評価 *Japanese Psychological Review*, *47*(3), 284-299.
- 佐藤 美佳 (2012). 自己決定理論の視点に基づいた看護学生の自律性欲求と自尊感情, 学習動機づけとの関連: 教育課程・学年別比較 八戸短期大学研究紀要, *35*, 53-71.
- 佐藤 美佳 (2013). 看護学生の友人関係への動機づけと学習動機づけ及び自律性欲求・有能さの欲求との関連: 自己決定理論の視点から 日本看護研究学会雑誌, *36*(2), 35-46.
- 佐山 豪太 (2015). ロシア語学習者の動機づけの構造: 自己決定理論における『有能性, 自律性, 関係性』の分析を中心に ロシア語ロシア文学研究, *47*, 163-179.
- 島 義弘・馬 暁玲・稲垣 勉 (2020). 自己決定理論から見た大学生の授業に対する動機づけ: 授業の選択可能性による差異の検討 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, *71*, 139-146.
- 城野 博志 (2017). ペア学習を楽しめない学生はやる気がないのか: 自己決定理論からのアプローチ 名古屋学院大学論集 (言語・文化篇), *28*(2), 115-123.
- 白土 厚子 (2019). 小学校教員を目指す学生へのプロジェクト重視の英語の授業実践: 自己決定理論の視点から 津田塾大学紀要, *51*, 251-272.
- 染谷 藤重 (2019). 小学生英語学習の動機づけと聴解力の関連性: 自己決定理論の枠組みを応用して 鳴門教育大学小学校英語教育センター紀要, *10*, 15-25.
- 杉山 貴哉 (2021). 友達と学び合いながら, 主体的に英語学習に取り組む生徒の育成: 自己決定理論に基づく OPP シートを活用した, ライティング指導を通して 愛知教育大学教育実践研究科 (教職大学院) 修了報告論集, *12*, 301-310.
- 鷲見 克典 (2013). 学習者における学習動機づけと適応: 自己決定理論に基づく検討 教育医学, *59*(2), 139-150.

- 鷺見 克典 (2014). 学習動機づけが心理的適応に及ぼす効果に関する予測的研究: 自己決定理論に依拠した検討 教育医学, *60*(2), 125-134.
- 鷺見 克典 (2015). ウェルビーイングに及ぼされる学習動機づけの効果: 大学生を対象とした自己決定理論からの検討 教育医学, *60*(3), 153-161.
- 鷺見 克典 (2017). 学習動機づけが後の学習結果に及ぼす効果: 大学生を対象とした自己決定理論に基づく検討 教育医学, *63*(2), 175-185.
- 玉木 宗久 (2013). 自閉症スペクトラム児の学習に対する動機づけ: 自己決定理論の枠組みによる検討 学校メンタルヘルス, *16*(1), 19-26.
- 田中 博晃 (2014). 自己決定理論における有能性の欲求の測定項目の検証: 「課題準拠」と「過去準拠」の視点を用いて *JACET journal*, *11*, 102-111.
- 田中 博晃・廣森 友人 (2007). 英語学習者の内発的動機づけを高める教育実践的介入とその効果の検証 *JALT Journal*, *29*(1), 59-80.
- 田中 佑美 (2019). 主体的な学びと小学校英語: 自己決定理論を用いた学習指導要領を具体化する試み 滋賀大学教育学部紀要 (教育科学), *69*, 109-114.
- 山本 淳子・大場 浩正 (2018). 日本人 EFL 大学生の動機付け向上を目指したブレンド型授業における e-ラーニングの効果: 自己決定理論に基づいて 日本教科教育学会誌, *41*(2), 27-40.
- 築瀬 歩・加藤 渡・角田 和代・市野 聖治 (2010). 体育学習における学習者の動機づけと教師の指導行動に関する基礎的研究: 外発的動機づけの自己決定理論を手がかりとして 日本教科教育学会誌, *32*(4), 59-68.
- 吉野 康子 (2008). 外国語としての英語学習の動機づけ: 自己決定理論の視点から 実践女子大学 *FLC* ジャーナル, *3*, 63-81.
- 吉崎 聡子・平岡 恭一 (2015). 自己決定理論に基づく動機づけと自己効力感からみたキャリア探索心理学研究, *86*(1), 55-61.

Toward the Realization of “Proactive, Interactive, and Deep Learning” Proposal of a Classroom Model Based on Self-Determination Theory

NAGANO, Yu and UCHIDA, Akitoshi

Abstract

To realize “Proactive, Interactive, and Deep Learning”, school education must improve classes to enhance the quality of learning and foster students who can actively continue learning throughout their lives. Therefore, this study focused on Self-Determination Theory, a theory of motivation. Self-Determination Theory states that intrinsic motivation increases when the needs for autonomy, competence, and relatedness are satisfied. On the other hand, although the Self-Determination Theory can approach a complete theory when it is accompanied by practice, it was found that there are few practical studies in Japan. Therefore, based on the findings from previous studies, we propose a lesson model of self-determination theory for practice in schools.

【Key words】 Self-Determination Theory, Class, Study, “Proactive, Interactive, and Deep Learning.”